



KUWATA CUP2022→2023決勝大会

2月26日 / 東京体育館特設レーン

斉藤琢哉、大嶋有香が"史上最大"の夢舞台を制す!



コロナ禍で開催日直前に中止となった第2回の決勝大会から3年。渋谷ヒカリエホールから東京体育館に会場を移して行われた「KUWATA CUP2022→2023～みんなのボウリング大会～」決勝大会のプロ部門は、男子・斉藤琢哉(48期・伊勢原ボウリングセンター)、女子・大嶋有香(49期・フリー)がそれぞれ優勝を飾り、ボウリング史上最大の約7000人大観衆の喝采を浴びた。(主催: KUWATA CUP2022→2023実行委員会 / 共催: (公社)日本プロボウリング協会、(公社)日本ボウリング場協会) カメラ: 関口佳代

今大会の決勝はステップラダー方式ではなく、男女各3名による1Gマッチで行われた。準決勝から1カ月間隔が空いた変則日程に加え、「メンテを重ねるたびにオイルの壁が厚くなっていった」(山本勲)という特設レーンの難コンディションが各プロを悩ませた。

男子プロ部門

斉藤は唯一ノーミスの快投
プロ部門JPBA大会では2つのパーフェクトを含む驚異の251.3Avg(23G)でトップを独走した山本が、2フレから3連続オープンで大きく出遅れ。「緊張もなく、うまく投げられていた」という小林哲也も2フレ③⑨の③ピンをカバーミスするなか、3位進出の斉藤がター



▲「こんなに速いレーンは初めて。普段イージーミスはしないのに、右サイドの残りピンを2回もですから(苦笑)」と小林。初Vが近くて速い

キースタートを決めて主導権を握る。斉藤は4フレ⑦のピンタップ(カバー)を挟んで5フレから再びターキー。山本もさすがのアジャストで5フレから5連発を決めたが時すでに遅く、勝負の行方は斉藤と、3フレからの4連発で追いつがる小林の2人に絞られた。

しかし、小林は8フレ③⑤⑥の⑥ピンを残す痛恨のカバーミスで万事休す。終わってみれば



▲序盤の3オープンが致命傷となった山本。「一発勝負の難しさはどんなコンディションでもある」と悔しさをにじませた

斉藤が唯一人ノーミスの246で夢舞台の頂点に立った。

「球質が違うせいか、ボク自身は練習ボールのときから難しさを感じなかった。勲さんと小林プロが投げづらそうにしているのを見て、今回はチャンスだと思った。小林プロがミスしたときに突き放せたのが勝因。これまで2位をたくさん経験してきたことが生きました(笑)」と斉藤。ゲーム途中には家族の応援が耳に届き、アイコンタクトをとる余裕もあったという。まさに会心の勝利だった。

優勝ボール: コロンビア300 トップスピード(レジェンドスター)

女子プロ部門

「最後まで諦めず」大嶋が逆転V

一方、今大会のラストに組まれた女子プロ部門決勝は、最後の最後まで勝負の行方が定まらない僅差の接戦に。エキシビジョンマッチ後にリメンテされたレーンはさらに難易度を増し、大嶋と岩見彩乃が8フレまでに2オープン。実質的に唯一右投げの坂本かやが1オープン、1ターキーで一歩リードする展開となった。

そして迎えた9フレ。大嶋、岩見がファウンデーションフレームとしたのに対し、それまでも不安定な投球が続いていた右レーンでの坂本の一投は



▲大嶋は18年のJLBCプリンスカップ以来5年ぶりの2勝目。終わってみれば予選から終始トップの座を守り切った「完全優勝」だった

②④⑧⑩と大きく割れて2つ目のオープン。「ちゃんと投げたつもりが結果的に割れたというのは、まだアジャストできていなかったということ」と天を仰いだ。

坂本のミスで大嶋、岩見にも逆転Vのチャンスが生まれた10フレ、先投げの大嶋が渾身のパンチアウトを決めたのに対し、1投目8本カウントの岩見がまず脱落。パンチアウトで同点プレーオフの可能性を残した坂本の1投目も⑩ピンがタップして、大嶋の逆転Vが確定した。思えば1、2フレのダブル



▲第1回大会準Vの坂本は「これまで自分でつかみ取った優勝はあっても、自分で優勝のチャンスを手放したの初めて」と4年越しの雪辱を果たせず、悔し涙を見せた

もブルックリンのラッキーストライク。勝利の女神は最初から大嶋に肩入っていたようだ。

「やっと優勝できた。これまでずっと、決勝まで行ってもうまくいかず、今回もか…と不安な気持ちで投げていたのでドキドキだった。10フレはしっかり投げ切ることを考えていた。その上でどうなるかという展開だったから、より思い切りかけた気がする。今年の目標は『一番(優勝)にこだわる』で、開幕戦でそれを達成できて本当にうれしい」と、大嶋は笑顔で声を弾ませた。

優勝ボール: エボナイト ザ・ワン リミックス(レジェンドスター)

男子プロ部門決勝

②	山本 勲	204	優勝
③	小林 哲也	210	
①	斉藤 琢哉	246	優勝

女子プロ部門決勝

①	大嶋 有香	200	優勝
②	岩見 彩乃	183	
③	坂本 かや	189	

※男女とも2位以下の順位は準決勝時の成績を加味して決定



▲決勝初進出の岩見は大健闘も初Vならず。思ったように投げられなかったけど、中のオイルが厚くて...優勝

▲斉藤は昨年10月の千葉オープン以来の通算3勝目。「準決勝のときは内容がよくなかったのが、1カ月空いたことが自分にはラッキーだった。今回は一番『優勝した』という実感がある」